

前回は触れなかったが、インフルエンザ対策を取り上げた2月初めのNHKの「ためしてガッテン」で指摘しておきたい事が2点あった。

先ず第一点は、今年のAソ連型はほとんど抗ウイルス薬タミフルに耐性を持っているというのは実験室内での結果で、臨床的には昨年と同様に効いているという話である。これはタミフルが効かないという報道に不安を持っている人に対して、安心して病院に行き、タミフルを出して貰って下さいという流れの話だとは理解できる。しかしこれでは科学を標榜する西洋医学としては極めて粗雑である。

番組で分かり易く説明されていたタミフルの効き方とは違う、効き方をタミフルは持っているということなのか。あるいはもともと臨床試験に誤りがあって、効かないのに効くとされ、実際の臨床で効いていると思われていたものは実は、100%患者自身の自己治癒力によるものだったのか。最近では安易な解熱剤の使用が少なくなっているようだから、以前なら解熱剤の使用によって患者の自己治癒力が落とされていたのが、そういうことがない為に、自己治癒力が十全に働いた結果ということではないのか。「効く」タミフルを使用できるということで、高熱にも医師は安心して、解熱剤の使用を控えられたとも想像できる。真相はどこにあるのだろう。

第二点はインフルエンザでも高熱になるとは限らないという事である。38℃以下の患者が65歳以上では5割近く、16~64歳では2割近く、15歳以下では1割近くいたというデータが紹介された。高熱になるのは防衛力が働く為である。お年寄りなどで高熱にならないのは防衛力が弱い為で、反ってウイルスは増殖している。熱的症狀は少なく、軽症に見えるが、危険である。

「ためしてガッテン」流に譬えで説明してみよう。

敵の侵入に気付かなかつたり、やっつける準備したりしている期間が潜伏期である。準備が整って攻撃する、その攻撃が激しい程、熱が出る。敵が強かつたり多かつたりすれば、戦いは激しくなって、より熱が出る。激しい戦いの為にからだは辛くなる。戦いは敵が弱い場合にも激しくならないが、逆に防衛隊が弱い場合にも激しくならない。お年寄りなどで高熱にならないのは防衛隊が弱い為である。しかしその場合、敵はどんどん侵入して来る。

解熱剤は防衛隊を引き上げさせる役割をするのだろう。症状が軽くなっても、危険なわけである。

お年寄りなど元気がない人で熱が少ないのはインフルエンザに限らない。東洋医学では陰証のカゼと理解される。お年寄りや冷え症の人など、頭痛、ノド痛など部分的な熱症状があっても、全身的には発熱は弱く、寒けばかりを感じ、眠くなる。陽証のカゼには葛根湯、麻黄湯などが使われるが、陰証のカゼには麻黄附子細辛湯などが使われる。

「カゼに葛根湯」と、冷え症の人が葛根湯を使えば効かないだけでなく、悪化することもある。ただし、冷え症だから必ず陰証のカゼと決まっているわけではない。実際の状態で判断しなければいけない。最初、葛根湯、次は麻黄附子細辛湯と切り替えなければいけない場合もある。

タミフル耐性の問題は今後、どう説明されて来るのか注視しなければいけないが、麻黄湯など漢方薬を本来の使い方を使えば、もっと有効にインフルエンザに対処できるはずである。今回はそれを説明したい。